

文化資源研究に於ける「漢学」の視座

— 地域文化研究(一) —

荒 木 龍太郎

第一章 始めに

今、長崎の街は「さるく博」の期間で多くの県外の人で賑わっている。そのグループの人々は長崎の歴史を示す石碑、説明板の前でボランティアの説明を熱心に聴いている。そして大浦天主堂・グラバー亭の学習熱心な人々は、次に孔子廟、唐人屋敷へと足を運ぶ。そして西洋と中国の二つの文化を実感するのである。

東山手と南山手に挟まれた地区は、長崎市の観光地の中心であり、長崎港を前にして南側のグラバー亭から大浦天主堂、孔子廟、旧上海香港銀行長崎支店、旧英国領事館（現野口弥太郎美術館）、洋館風住宅群、東山手一二番館（現居留地私学歴史資料館）などをはさみ、活水女子大学のある東山手、さらに周辺の新地中華街、唐人屋敷、出島などである。その地域は、大部分が幕末から明治にかけての埋め立て地であり、今でこそその面影は一箇所を集められた洋館群にしか見られないが、当時は整然と区割りが施され、ホテル、教会、学校などの洋館が建ち並ぶ地域だったのである。では何故、嘗ての洋館群の中心に孔子廟が有るのだろうか。この辺りを少し歩いた人は、誰しも素朴にそう思うに違いない。

ところで明治期の洋風建築物が減少する中、目を転ずると赤い屋根の校舎が目に入ってくる。明治一二年（一八七九）

にキリスト教メソジスト派宣教師のエリザベス・ラッセル女史（一八三六～一九二八）による創立の活水女子大学（旧活水女学校）である。そして校名の「活水」という名称について、ラッセル女史の自筆の手記にこうある。

「・・・学校にも名前をつけようと考えました。そこへ神学生が、自分に名付けの役をさせて欲しいといってきました。彼が言うには、漢詩に「活水」という表現があるというのです。それは文脈からすると「流れ出て此の世を新たに
する活きた水の湧く泉」を意味することでした。そこで、これを校名とすることにしました。

活Ⅱ湧き出る泉、

水Ⅱみず、

女Ⅱ少女、

学校Ⅱ学び舎。

「活」と「水」は一つに組み合わせる「活水」と書けるので、纏めると「活水女学校」となるのです。」（「活水学院の創立者 エリザベス・ラッセル女史の生涯」一九九八）

この神学生が提示した「活水」の語は朱子の「観書有感」【注①】の語として見るのが妥当である。意味は「源頭活水Ⅰ泉の源から勢いのよい水が流れる」である。神学生の詳しい学歴は不明であるが、儒学Ⅰ朱子学の基本的な素養は持っていた、当時の平均的な知識青年であったであろうと推測できる。

このことは明治初期の、近代化へ向かう日本の異文化との出会い、また理解の状況を端的に示している。西洋近代の教育・文化・宗教の施設に「活水」という朱子の語句、一般的に言うならば儒学・漢学の教養・文化が重ね合わされて理解が進展したのである。この具体的事例は、恐らく明治初期の日本の一般的状況であろうが、ことに東山手と南山手に挟まれた地区及び周辺は、他と異なりオランダⅠ出島Ⅰ大浦天主堂Ⅰキリスト教Ⅰ活水女学校、中国Ⅰ唐館Ⅰ長崎聖

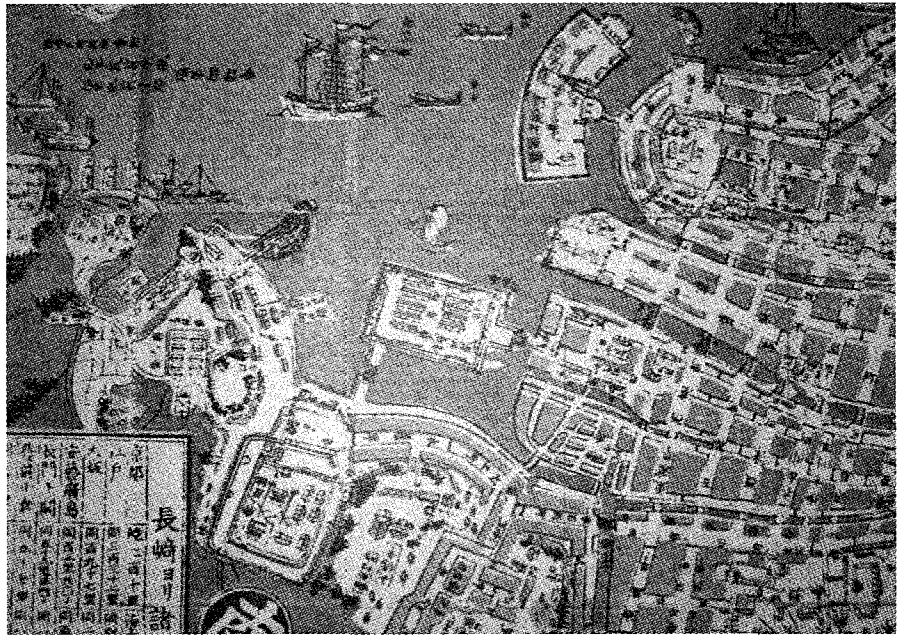
堂―儒教―孔子廟―時中小学校という、江戸時代から中国と西洋の文化が混在した歴史的文化資源を有するのである。ただ歴史的に中国文化―儒教文化が優勢であって、西洋文化―キリスト教文化は禁教による空白がある。では、このような長崎の文化風土の中で、儒教の教養を持つ知識人層はいかに西洋のキリスト教・文化に対応し、咀嚼したのあろうか。異文化に接した時、いかに理解を示しその長所を認め受容するのか、などの究明は、国際的地域の文化資源を考察する上で必要なことと考えられる。

グラバー園のすぐ下の松ヶ枝埠頭は、かつては海岸でオランダ船、飛船Ⅱ唐船が停泊していたが、今日は、外国の大型客船が埠頭に接岸し観光客が訪れている。観光資源としていかに活用するか、歴史的に多角的に、この地域の文化資源を考察すべきであろう。そのことは地域振興のための基礎作業ともなるであろう。本論は、多角的な地域文化研究の視座設定のための考察として位置づけたい。

第二章 出島と唐館

始めに長崎の文化を考察するに当たり、歴史的に概略を示しておきたい。周知のように長崎の文化は、外国との貿易によって形成される。長崎港は一五七一年に開港されてより、九州各地に渡来したポルトガル船やスペイン船が集中するようになり、その後唐船の入港も増加して栄えた。そして一六三三年（寛永一〇）の鎖国令以降、長崎は唐船、オランダ船に限る外国貿易の唯一の港となり、一八五九年（安政六）の開港後は特権を失い、維新後は次第にその優位性は薄れていった。

長崎の文化は、異文化が自然と混在している。その歴史は江戸期の出島と唐人屋敷に由来する。出島は、一六三五年（寛永一二）長崎湾内に造成された人工の島である。一六四一年ポルトガル人来航禁止に伴い、同年オランダ商館は出



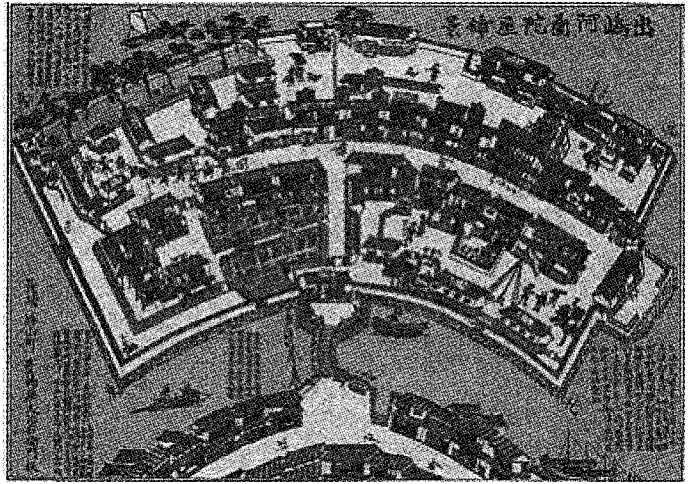
島に移転を命ぜられ、一八五六年（安政三）まで続いた。一般的には商館員は、他の地域に立ち入ることを許されなかった。また日本人も出島への出入は禁止されていた。一八五五年にオランダ人が長崎市内に出ることが許され、一八五六年の出島開放令が出てから出入は自由になる。現在は埋め立てられた出島の復元が進められて、観光資源として活用されている。

もう一方の「唐館」（唐人屋敷）は、幕府が密貿易やキリスト教の伝播防止の目的で、長崎に来航する中国人を収容した施設である。一六八九年市内に散っていた中国人は、民宿を禁じられ、長崎郊外の十善寺村（現在の館内町）に設置した施設に収容された。一般の日本人で出入りできる者は遊女のほかは指定された商人のみに限定された。外出は比較的自由で、広大な敷地内には住宅の他、店舗、祀堂などが建ち並んでいた。

また通訳は一六〇四年（慶長九）〜一八六七年（慶応三）の解散まで唐通事が行うが、それ以外にも阿蘭陀通詞と異なり貿易業務、外交事務、中国人の生活などにも深く関わっていた。

制限された外国文化との交流ではあったが、卓袱料理に象徴されるように、庶民には漸次浸透し、長崎の文化の土台を形成して行ったと考えられる。

また異文化交流の観点から、これらの出島、唐館以外に「中島聖堂」に注意をほらう必要がある。長崎聖堂（中島聖堂）は東京の湯島聖堂、佐賀県の多久聖堂と共に日本三聖堂のひとつである。儒者向井元升が一六四七年（正保四）



に開いた儒学の学問所で当初は立山書院と称した。一六六三年の長崎大火で全焼した後、再建され多くの儒者を輩出した。後に元升の子・元成が主宰して一七一一年（正徳元）、中島川河畔に移転し再興された。その後は中島聖堂と呼ばれた。正徳元年の移転再興の時、長崎に渡来していた中国人の儒者沈蔭庵が定めた孔子を祭る儀式「積奠」の内容を明治維新まで継承した。聖堂は長崎奉行の保護されていたが、明治初年に廃滅した。

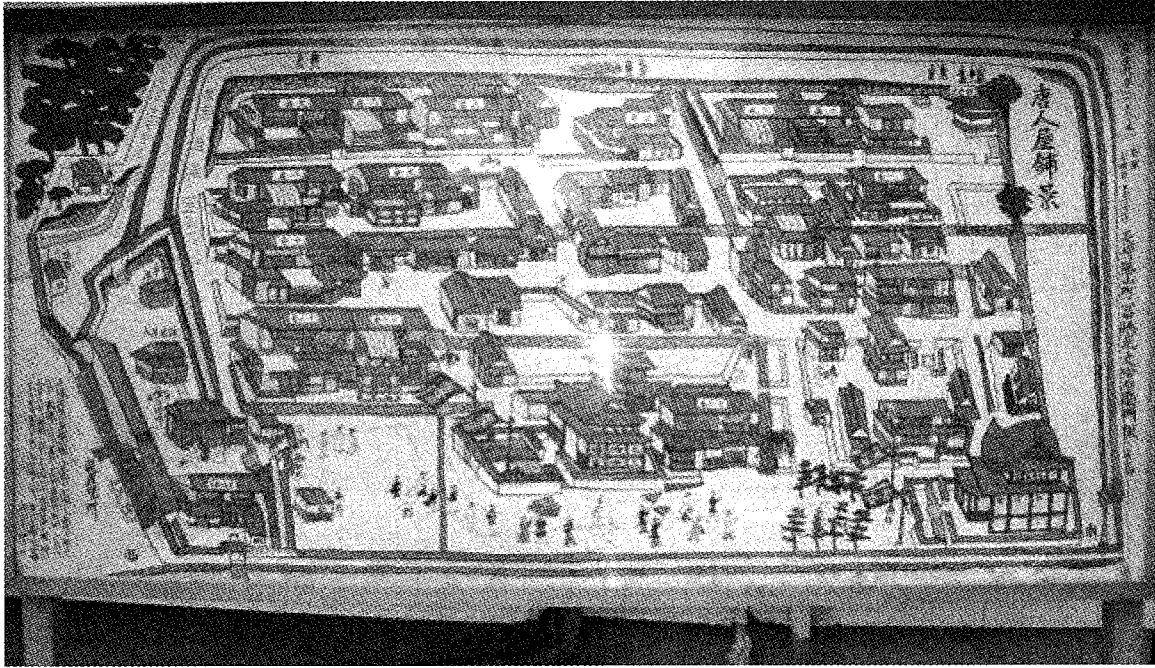
中島聖堂の祭酒（首長）は代々向井家担当し、儒学思想の普及が進むことになったであろうが、しかしもう一つの幕府の書物改役（禁書調査役）も兼ねており、キリスト教文化、中国文化受容に於ける統制・管理の役割をも担っていた。ただ儒教については一般的に受容・顕彰・普及に貢献したと言えるであろう。

第三章 活水女学院

一八七九年（明治十二年）、一月二三日、エリザベス・ラッセル宣教師が長崎に到着し、当時の女子のほとんどが仮名の読み書き程度であった時代に、「女子に最高の教育を」の理念を掲げ二月一日に女子生徒一名を迎えて開校している。

ラッセルが到着早々に活動できたのは、デイビソン宣教師の尽力による。その当時の「西海新聞」（明治十二年一月二五日）に生徒募集の広告を出している。

「私共儀今般大浦切り通シ上へ十三番地ニ於テ女兒学校開設致シ殊更月謝モ廉ニシテ英語ト日本普通学其他西洋凡テ



「十善町唐人屋敷案内板」

女手芸一ツモ不遺音楽等ニ至ルマデ教授可致間有志ノ処女子御入校有
ランコトヲ希望ス

追テ有志ノ御方ハ大浦切り通シ上リ詰メ六番地デビソン氏方エ御来
臨ヲ給ハラハ月謝及ヒ教授方法等ハ悉シク御知ラセ可申候也

大浦切り通シ十三番地 ロッセル氏

ギール氏」

唯一の生徒の官梅能^{かんばいよし}は唐通事の官梅氏【注②】の娘である。唐通事の
家は、長崎の中でも異文化交流が色濃い環境である。おそらくは、日常の
生活環境が、異文化に対して自然に対応することを可能にしたのであろう。

活水女学校についてキリスト教からみた論述は多い。【注③】そこ
で、本稿はその初期の教育内容の中の「漢学」に注目したい。キリス
ト教文化に対する儒教文化の人々の理解の過程を明らかにしたいから
である。明治二十二年に設けられた科別は、秋期・冬期・春期の三学
期制で初等科（四年）、中等科（四年）、高等科（四年）、神学部（四
年）、音楽部（予科を入れて六年）、技芸部（四年）、画術部（四年）
である。初等中等高等の三科は段階的に進級するものとし十二年を要
する。初等科の一年次の始めから「英語」の履修があるのは当然とし
て、注目すべきは高等科の「漢学」関連である。

◇活水のカリキュラム【明治二十二年規則書】

聖書唱歌圖畫日本裁縫女紅作文等ハ各級ニ之ヲ授ク 右各級共初メノ一課ハ各二本書籍ヲ用ユ	年 四	年 三	年 二	年 一	高 等 科
	漢學 天文學 論理學 神學	支那近世史 道德學 基督教徵證論 地質學 文明史	支那歷史並ニ漢文學 教會歷史 化學 經濟學 心理學	支那歷史並ニ漢文學 教會歷史 物理學 英文學	秋 期
	漢學 本朝文法 礦物學 聖書文學 希臘羅馬古蹟學	同 天文學 同上 同上 同上	同 經濟學 化學 心理學	同 同上 同上 同上 同上	冬 季
	漢學 本朝文法 聖書文學 希臘羅馬古蹟學	同 教育學 同上 同上	地質學 道德學 同上 同上	同 米文學 同上 同上	春 期

文化資源研究に於ける「漢学」

右のカリキュラム表の一年、二年の秋・冬・春期に「支那歴史並ニ漢文学」、三年秋・冬期「支那近世史」春期「漢学」、四年の秋・冬・春期に「漢学」の履修がある。これは明治十五年に天皇が文部卿に儒教主義的教育方針を貫徹すべく「学制規約につき勅諭」を示したように、行きすぎた欧化主義に対する歯止めが示された時代状況がある。しかし後には近代化―西洋化による価値観の変化に伴い漢学が衰退し、西洋の学問が取って代わって主流になってカリキュラムにも反映していくのである。【注④】。

ところで活水の漢文関係はいかなる人物が担当していたのであろうか。活水の先のカリキュラム設定は、明治二五年一月（明治三二年六月もおそらく大きな変更なく実施されていたと考えられるが、その間に在職した漢文関連担当者は足立清三と推定できる【注⑤】。足立氏は「活水起源」を以下のように述べたという。（『活水五十年史』一九頁・所引）。

「若我活水之翼、非所謂資好生之物耶。校以基督教為躰、以普通学為翼。其所以在慈善博愛、豈不亦善哉。且其地則爽塏快澗。其築則輪奐宏美、其師則專攻精芸之名家。其生則温良貞淑之女子。教学相資師生相勤。宜哉其实晨発而夕達。其名曰盛而月旺焉。予嘗読丁氏天道遡源。討其精、究其微。而後徴諸新旧二聖書、益知上帝好生之沢其源即是一派之活水也。併又悟儒耶無二天也。孟軻氏曰源流混混不捨昼夜。蘇末披曰、如水在地中。無所而不在。朱文公曰、源頭活水、其实皆謂資生也。嗚呼活水之沢、悠也。久也。」

（我が活水の翼の若き、所謂好生の物を資するに非ずや。校は基督教を以て躰と為し、普通学を以て翼と為す。其の的する所は慈善博愛に在り。豈に亦た善ならざらんや。且つ其の地は則ち爽塏快澗、其の築は則ち輪奐宏美、其の師は則ち精芸の名家を専攻するなり。其の生は則ち温良貞淑の女子。教学相資、師生相勤む。宜なるかな、其れ実に晨に発して夕に達す。其の名、日に盛んにして月に旺んなり。予、嘗て丁氏の天道溯源を読む。其の精を討め、其の微を究め

て而る後に諸を新旧の二聖書に徴し、益す上帝の好生の沢を知る。其の源は即ち是れ一派の活水なり。併せて又た儒耶の二天無きを悟る。孟軻氏曰く、源流混混として昼夜を捨ず、と。蘇末披（?東坡）曰く、水の地中に在るが如く、所として在らざる無し、と。朱文公曰く、源頭活水、と。其の実は皆資生を謂うなり。嗚呼、活水の沢や、悠なり、久なり。」

足立氏が読んだ漢文の「天道溯源」【注⑥】は、明治十四年の中村正直の訓点本であろうか。この書物は儒教的論説でキリスト教の優位性を実証しようとしたもので、中国・日本大きな影響を与えた。儒教的素養を持つ足立氏もおそらくは、理解しやすかったと思われる。「上帝」【注⑦】については、同一視を首肯できるが、ただ「天」については、中国の古代から近世にかけて意味概念が変遷するので儒教の「天」と同一視するのは安易である。しかしながらこのような儒教の天・上帝の概念を用いての理解の仕方は、中国でも行われており、儒教の側からキリスト教を理解する上で一つの型を示している。

第四章 孔子廟と時中小学校

先述のように長崎は江戸期には中島聖堂があり、儒教尊敬の意識が強かったと言えるであろう。現在の孔子廟は、一九六七年（昭和四二）に大修復工事が行われ、中国政府の日本における唯一の常設博物館として「中国歴代博物館」を併設している。もとは一八九三年（明治二六）創建の純中国式建築孔子廟であって、清国政府が海外華僑のために造ったものである。建設工事は全て日本人で行われた。

そしてこの孔子廟の中に華僑学校である長崎華僑時中小学校が、一九〇五年（明治二八）、清国駐長崎領事下絳昌が提唱し、長崎の華僑が協力し、三月一五日開校した。長崎県知事への届け出の校名は「公立時中小学校」であったが、

私立小学校として許可された。また清国の学務大臣に許可を申請し、清国公認の「時中小学堂」となる。孔子廟の中に敷設された時中小学校の基本精神は儒教精神の尊重と言えるであろう。時中の名称は「君子之中庸也、君子而時中」による。時中とは、「時に随い変に処してその宣しきにかなう」という意味である。ただ領事は、おそらく科挙を経てきているから儒教（朱子学）が基本的立場であったであろう。故に中庸の語は「天下の正道」「天下の定理」とあるように【注⑧】、朱子学の根本的立場を鮮烈に示すものであって、「校歌」にも儒教意識が前面に打ち出されていると考えるのが妥当であろう。

孔子廟建設への清国政府の後押し、領事の華僑学校設立の提唱は、当時の日清戦争前後の、対中国観の逆転、尊敬から軽視への意識の変化、また日露戦争前後の国際状況が影響していると考えられる。国外の華僑への精神的支援の意図があったといえる。（以上、『時中—長崎華僑時中小学校史文化事業誌』一九九一・参照。）

「校歌」は次の通りである。

我們学校在聖廟（我らの学校は聖廟に在る）

我們校名叫時中（我らの学校の名は時中という）

大哉孔子聖之時【注⑨】（なんと偉大であるか、孔子が時宜にかなうのは）

中庸大道応尊崇（中庸の偉大な道は尊ばなければならない）

こうみてくると孔子廟は、長崎在住の中国人にとっての精神的支柱の役割を担っていたと考えられる。では何故孔子廟が、洋館群の中に建てられたのであろうか。場所は大浦の埋め立て地で西洋人の文教地区であった。菱谷武平氏の『長崎外国人居留地の研究』【注⑩】によると、明治になると唐館に居住していた中国人が大浦の西洋人の「使用人」としての身分で権益の確保をはかるために大浦地区に居住し、西洋人が横浜、神戸を重視して移動していった後、さらに中

国人の居住が増加していったことによる。その中心の場所に精神的支柱として孔子廟が建てられ、その子弟のための華僑小学校が設置されたのである。

第五章 ま と め

以上、中国と西洋の文化が混在する長崎の文化について、「漢学」を視座にして考察を進めてきた。それは幕末から明治にかけて長崎で呼吸し、キリスト教の女学校で漢学を教授した足立清三氏の視点でもある。

この「漢学」の視座は、キリスト教理解・受容の型を鮮明にし、また「長崎聖堂」の系統―日本の儒学―であるが故に、大浦の「孔子廟」との性格・意図の相違を浮き彫りにすることが可能であった。

地域文化に対して複眼的に考察し、その歴史的「厚み」を視野に入れてこそ、世代を超え、また他の地域・国々との理解も実りあるものになるであろうし、それでこそ「国際都市」と言えるであろう。

今回は複数の異文化が、混在する地域の文化資源の理解の方法についての素描でもある。今後、個別に考察を深めていきたい。

注

【注①】 「半畝方塘一鑑開、天光雲影共徘徊、問渠那得清如許、為有源頭活水來。」（晦庵先生朱文公全集・卷二）

【注②】 官梅氏の先祖は林道栄。唐通事の最高位であった。現在の松ヶ枝通りあたり（大村領戸町村大浦郷）を大村藩主から別荘地として与えられている。居留地の監督役でもあった。

【注③】 本稿では、坂井信生著『明治期長崎のキリスト教』（長崎新聞新書・2006）を参考にした。

【注④】 活水女学校が創立された明治初期の漢学の状況を、幕末維新期の、広島の儒学者（陽明学）吉村斐山（一八二二～一八八二）と岩国藩の東沢瀉（陽明学者・一八三二～一八九一）の事例で示しておきたい。拙著『吉村秋陽』（明德出版・一九八二）参照。

維新後の状況は、文明開化の時代であるが、広島は儒学者吉村斐山が継承してきた漢学は、その存在を脅かされ、活動の大きな拠点の藩校も、明治四年七月の廢藩置県を経て解体される。斐山は同四年以降は専ら家塾で学問を継続してゆくが、同五年の学制発布は家塾「咬菜塾」経営を直撃し、多大の影響を与えた。斐山は当時の藩の学政について、皇漢西医が並列して一定せず、一応漢学は盛んであるが、「宋明の性理の学へ志す者は以後出てこないのでは、と慨嘆しております。どうかして万分の一でも性理の学問を支持しようと日夜奮励努力しておりますが、誰も同調してくれず、孤立の状態です」（陽明学者書簡集・草庵宛書・明治四年一月五日四〇九頁）と不安をもらしていた。明治五年八月に学制が発布されると、それまでの家塾が不許可となり、やむなく私立の小学校へ勤める決心をする。その間の事情を次のように述べる。

「西洋の気風が、ますます盛んになり、当県などは純粹の支那学は廢業し、家塾であっても、文部省の小学教則を基準にして開業すべし、という布告がありました。このため家塾も右の教則を取捨して書類を提出しましたところ、許可がおりず、洋学校へ依頼した教則の内容を設置して更に申請すべし、との達しがありました。さてもさても困った事でございます。漢学は槁葉絶根の意旨であろうかと噂しております。」（同五年・十二月・四一三頁）

家塾はようやく明治七年に小学校の科を授けるに相当するものとして認可され、八年一月に「変則中学」として認可される。一方、来学の塾生の質も変化し、漢学は師範学校入学のための手段と化し、儒教の経籍を修業する者はいない状況であった。このような中、明治十三年十一月に斐山は家塾廢業を申し出る。その後を、子の彰（一八五三～一九〇八）が変則中学校の名称を廢止して「漢学専門・留正書院」を開いた。当時の漢学の衰退現状をふまえてのことか、その規則第一条には「該塾は学齡外の生徒にして、漢学専門修業志願者を教育するを主とす。故に先づ自己の志を確定し熟考深思の上入塾すべし」と記している。

「留正書院課程表」

科目	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級	第六級
講義	学庸諸書	論孟	左伝	文章軌範 謝撰拾遺	日本政記 初学文要	十八史略
論議	左伝	左伝	文章軌範 謝撰拾遺	日本政記 初学文要	十八史略 元明史略	十八史略
會議	八大家文	八大家文	日本外史	日本外史	皇朝史略	皇朝史略
質問 作文						

世間の漢学に対する評価も西洋の文化・学術が広がるのに従ってすっかり様変わりし、漢籍などは無価値の扱いを受け（東沢瀉全集一〇六五頁参照）、「孔孟の学」、儒教は批判の対象とさえなっており、「国勢一転して已来、事は必ず諸を西洋に法り、蟹文駄語は殆ど閩里に遍く、一も鄒魯の説を唱える者有れば、衆、争い叱りて以て怪と為す。」（同一〇七三頁）という惨憺たる状況であった。

そして沢瀉も塾を経営するが、明治四年の「沢瀉塾教条十三則」の冒頭に「凡入吾門者、致知力行、務明聖学。言語動作、必於礼法、在内在外、勉之強之」と述べている。沢瀉はと従来「聖学」「礼法」「性命の学」を基準にする訳であるが、文明開化の世風は「日に利を貴び義を賤しむに靡き」（同一〇〇九頁）、功利を追求する風潮は、周辺の者たちにも及んでおり、沢瀉には到底許容できるものではなかった。

また儒教の五倫の立場よりするなら、男女同権の説は「聖人の道を蕩するもの」（同一〇八九頁）と映るのである。この

ような風俗の変化は儒教の衰退であり、その理由は「夷教日に盛んにして、孔孟の道、将に湮滅せんとす」（同八七八頁）
るからであるとし、夷教＝西洋の文化に対して儒教を滅ぼすものとして危機感を募らせるのである。このように儒教意識を
鮮明にするが故に、仏教・国学は無論のこと、キリスト教に厳しい目を向けたのである。

【注⑤】 足立清三、号は敬亭、古情人。一八五七～一九二一。享年六五。『活水五十年史』旧職員録には明治二十五年十一月から
三十二年六月まで在職とある。榎津町に生まれる。彼の孫に当たる足立卷一著『虹滅記』（朝日文芸文庫）は三代にわたる
詳細な伝記である。西道仙に師事し、菊池三溪、依田学海とも交流し、長崎のみならず明治期以降の日本漢学の現状を知る
上で大いに参考にすべきである。今回は足立敬亭と推定しておくが詳しくは別稿にて論究したい。

【注⑥】 一八五四年、宣教師マーティンによって中国語で書かれた教理書『天道遡原』は、中国および日本において大きな反響
を巻き起こした。足立氏読んだテキストは長崎の宣教師が上海から輸入した漢籍であろう。先掲坂井書一一八頁参照。

【注⑦】 『詩経』『書経』などの儒教経典に見える宇宙の最高神。「上帝」は天上の帝王の意。「万物の上に位置してこれを主宰し、
下民の行為の善悪を公平無私に評定して禍福を下す人格神であり、特に、王朝の存亡は上帝の意志によると考えられたため、
その祭祀は帝王みずから行うべき最も重要な国家祭祀とされた。

【注⑧】 『中庸章句』第二章「仲尼曰、君子中庸、小人反中庸。君子之中庸也。君子而時中。小人之中庸也。小人而無忌憚也。」
の朱子注に「中庸者、不偏不倚、無過不及、而平常之理、乃天命所当然。精微之極致也。惟君子為能体之。」とある。
朱子『中庸章句』の前文に「子程子曰、不偏之謂中、不易之謂庸。中者、天下之正道。庸者、天下之定理。此篇乃孔門傳授
心法、子思恐其久而差也、故筆之於書、以授孟子。」とある。

【注⑨】 「孟子曰、伯夷、聖之清者也。伊尹、聖之任者也。柳下惠、聖之和者也。孔子、聖之時者也。」（孟子・万章・下）

【注⑩】 『長崎外国人居留地の研究』第五章「外国人居留と華僑」（一九八八・九州大学出版会）